

形容詞の語形成についての歴史的研究

村山, 実和子

<https://hdl.handle.net/2324/4474908>

出版情報：九州大学, 2020, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

(様式3)

氏 名 : 村山 実和子

論 文 名 : 形容詞の語形成についての歴史的研究

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、日本語の形容詞の語形成について、歴史的観点から考察を行うものである。

現代共通語において、形容詞を新たに造ることはあまり行われぬ。特に、形容詞を派生する接尾辞について「子どもらしい」「大人っぽい」は比較的造語力を有するが、「長たらしい」「言い訳がましい」のような形式は、すでに固定化している。さらに、「似つかわしい」「いかがわしい」のように接尾辞としての共時的な意識がなくなり、一語化しているものもある。では、このような接辞による語の派生は、歴史的にどのように行われ、現代に至るのであろうか。また、もし多様な形式が見られる時代があり、それが現代に至る過程で衰退・固定化したのだとすれば、その変容のプロセスや時期に、何らかの傾向は認められるだろうか。本論文ではそのような問題意識のもと、形容詞の語形成の史的変遷について記述することを目指した。

本論文は、序論、具体的な考察を行う第1章～第6章、結論と附章によって構成される。序論では、先に示した問題の所在と本論文の目的について述べた。

第1章「「形容詞化接尾辞による派生」における課題」では、本論文の前提として、形容詞化接尾辞に関する先行研究の整理を行い、当該分野における課題を提示した。併せて、「接尾辞」の認定について、本論文の基本的な立場を示した。第1章を踏まえ、第2章～第4章では、形容詞化接尾辞による派生をめぐる個別の事象を扱った。

第2章「接尾辞「クロシイ」の成立と展開」では、近世を中心に見られる「～クロシイ」という形式について述べた。現代共通語で「重苦しい」「暑苦しい」と表現される「～クルシイ」という形式との関係に着目し、文献調査と現代方言の状況から、「～クルシイ」が複合形容詞後項ではなく、中世から近世にかけて新たに発達した、形容詞を語幹にとる接尾辞「クロシイ」であったことを明らかにした。

第3章「接尾辞「ハシ（ワシイ）の変遷」では、中古以降は衰退すると見られていた接尾辞「ハシ（ワシイ）」が、成立当初は、動詞をもとに形容詞を派生する接尾辞であったものの（似つく→似つかわしい）、中世を境に、既存の形容詞から二次的に形容詞を派生する形式に変容し（恥づかしい→恥づかわしい）、近世にかけても造語の事実が認められることを示した。

なお、中世以降に成立した「～ハシ」の多くは近代までに衰退するが、その中で唯一の例外である「いかがわしい」という語が語彙的に固定化する経緯については、第4章「「いかがわしい」の成立と定着」で詳しく述べた。

これら個別の事例から、中世から近世にかけて「形容詞を素材として新たな形容詞を派生する」ことが積極的に行われていたものと推定し、その妥当性を検証しようとしたものが、第5章「形容詞語幹+形容詞化接尾辞による派生」である。ここでは、同時期に見られる形容詞化接尾辞の特徴に着目し、形容詞の語形成の類型化を試みた。

さて、「形容詞を素材として新たな形容詞を造る」ことは、接尾辞による派生に限らず、接頭辞による派生や、形容詞同士の複合もこれに含まれる。第6章「ワル（悪）+形容詞」の消長—形容詞語形成の観点から—では、形容詞の語形成の史的変遷を別の視点から捉えるために、接頭辞による形容詞の派生を取り上げた。近世～近代にかけて見られる接頭辞「ワル」は、「わるあまい」「わるながい」のように、形容詞と結合し、程度の甚だしさを付加した形式である。現代共通語であれば「いやに甘い」「長すぎる」のように外接する別の文法形式で表しそうなところであるが、当該時期においてはそれを表現する手段として、「派生」が有効であったことを示唆する事例として注目される。

結論では、本論文のまとめと課題を述べ、附章として「動詞「めかす」の成立」を附した。本論文によって、形容詞の語形成史の中でも、これまであまり論じられていなかった、中世～近世における形容詞の派生の一端を明らかにすることができたと考える。

今後の課題として、第6章で示したように、形容詞の語形成について、接尾辞による形容詞の派生以外にも目を向け、引き続き個別の事例を検討することが挙げられる。また、今回取り上げた語の中には、擬古的な文体で使用される例も多く含んでおり、文体や位相に偏りはないか、広く生産性を有していたのかどうかについて明らかにすることが課題であるといえる。語の生産性に関しては、方言において、共通語に見られない多様な形式が散見されることから、方言調査によって新たな視点が得られる可能性があることも述べた。